

マルクスにおける競争の概念について

著者	尾形 憲
出版者	法政大学経済学部学会
雑誌名	経済志林
巻	26
号	2
ページ	132-171
発行年	1958-04-05
URL	http://hdl.handle.net/10114/7490

マルクスにおける

競争の概念について

尾 形 憲

はしがき

マルクス経済學における諸範疇は固定的な一片の定義によつて一面的に理解さるべきものではなく、常に發展的・流動的に把握されねばならないといわれる。例えばエンゲルスは言う。

「マルクスは展開する所で定義しようとするのだという、又總じてマルクスの理論では固定的で完成された・絶對的に妥當な・定義を搜しまわることが許されるのだという、誤解……。事物およびその相互關係が固定的なものとしてでなく可變なものとして把握られる場合には、その思想的模寫たる概念もやはり變化及び變形を蒙るということ、それは硬化した定義に閉じこめられることなく、その歴史的または論理的形成過程において展開されるということ、——こうしたことは全く自明である⁽¹⁾。」

(1) Kapital, III, Vorwort, S. 14. 青木文庫版、第八分冊、三〇頁。

諸範疇が不斷に發展する社會關係の反映としてそれぞれの形態規定 (Formbestimmtheit) を與えられるものである以上、「こうしたことは全く自明」であり、取上げられる範疇が基本的・抽象的なものであればあるほどそうであるといえよう。然しながらここに注意しなければならないことは、このことは諸範疇が社會關係を反映してその時々 に一定の規定を與えられる何物かであることを否定するものではない、ということである。むしろ、科學の任務は、社會關係の發展に伴なつて種々形態を變え新たな諸規定をうけとりながらもこれらの背後に一貫するこの何物かを究明してその一般的概念を明確にし、そうした上で種々の段階におけるその變容をかゝる一般的概念に基づく發展として理解することにある、といつてよいであらう。

競争論は、以下行文中に明らかにされるであらうように、マルクスによつて一般的・原理的な形では確立されたブルジョア的經濟の分析——所謂「資本一般」——を基礎として、私たちが現實を説明しようとする場合の最初の手がかりをなすものであるが、これがどのような形で展開されるにせよ、右に述べた所からして、先ず第一にマルクスにおける競争の一般的概念がどのようなものであるかを明らかにしておくことが、必要不可欠の前提となり、出發點となるであらう。即ちただ單に同部門内の競争とか、異部門間の競争とかいつた個々の現われ——それらは確かに全體の中でも最も重要な諸契機ではあらうが——として競争を斷片的にのみ捉えるというのではなくて、これら種々の競争をその連鎖の一環とするような、あるいはもっと正確に言えば社會關係の發展に應ずるその諸契機とするような、本質的な概念が先づ統一的・發展的に把握されなければならないであらう。

このような目的のために本稿では次のような順序で考察を進めることにする。即ちはじめに第一節と第二節で、マルクスが競争を説く場合——彼のいわゆる競争論に屬するものとしてにせよそうでないにせよ——²⁾どのようなことを

問題として具體的にとり上げているかということが個々について検討される。この場合、同部門内の競争および異部門間の競争については何れも『資本論』において詳細な展開が行われており、かつこれを『グルントリッセ』のような初期の段階のものと比べると著しくその敘述の内容も異なるので、これと比較対照しながら、夫々検討がなされるが、爾餘については概ね断片的な言及のみに止まり、しかもその内容については種々疑問の點も多いので、『グルントリッセ』、『剩餘價值學說史』、『資本論』などを通じてそれらの中で論じられている問題點を指摘するのみに止める。かようにしてこれらの諸問題を通じていわば側面から競争の概念が浮彫りにされる。この後第三節ではこれと對比しながら、競争の一般的概念についてマルクスが彼の諸著作、就中『グルントリッセ』において展開している所について、その内容の検討が行われる。

(2) ある問題がマルクスの理論體系の中のどこに属するかというようにないわゆるプラン問題はそれ自體としては重要な意義をもつが、かかる問題を扱うのが本稿の目的ではないので、本稿では敘述の關連する限りにおいてのみこれに考察を及ぼすものとする。

(註) 本稿では引用及参照原典頁の指示において、次の略語を用いる。

Elend K. Marx, "Das Elend der Philosophie", Berlin, 1962.

Grundrisse K. Marx, "Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie. (Rohentwurf). 1857—1858", Berlin, 1963.

Kritik K. Marx, "Zur Kritik der politischen Ökonomie", Berlin, 1951.

Mehrwert K. Marx, "Theorien über den Mehrwert", Berlin, 1923.

Kapital K. Marx, "Das Kapital", Berlin, 1953.

Briefe "Briefe über Das Kapital", Berlin 1954.

Schriften K. Marx u. F. Engels, "Ausgewählte Schriften in zwei Bänden", Berlin, 1953.

尙邦譯は必ずしもそこに擧げられたものの譯文通りではない。又引用中の傍點および角括弧（〔 〕）内はすべて筆者によるものである。

—

本論に入るに先だち豫め注意しておかねばならないことは、『グルントリッセ』がマルクスの初期のプランの「資本一般」に當るものとして書かれており、競争に關する諸問題は此處彼處において言及はされながらも、又屢々まとまった形での覺書などはあつても、いずれもここでの本來の問題とされず、すべて次の競争論に屬するものとして立入つた展開はなされていまいということである。従つてここに取上げられる同部門内の競争や異部門間の競争なども、『グルントリッセ』においては、本來資本一般にかかわりを持たないものとして概ね他の諸問題との關連においてのみ説かれていたのであつて、これを『資本論』などにおける詳細な敘述と對比して見れば、その間の差は一目瞭然である。然しながらその差異は單に精粗の差といった量的なもののみであるかどうか、私たちは以下個々の競争についてその内容に立入つてみよう。

(1) これについてはここで詳細に立入る餘裕を持たないが、例えば大阪市立大學『經濟學雜誌』第三十一卷第五・六合併號所收、佐藤金三郎『經濟學批判』體系と『資本論』参照。

先ず同部門内の競争について『グルントリッセ』を一見して誰しも直ちに氣づくことは、事柄自體のもつ重要な意義——市場價值と個別的價值との差としての特別剩餘價值が、個々の資本家にとつて直接の推進的動機として作用し、彼を無限の生産力の増大へ驅り立てるものであること——にも拘らず、同部門内の競争に關連した市場價值とかマルクスにおける競争の概念について（尾形）

個別的價值とか、更には特別剩餘價值とかいった言葉、あるいはそれらを意味していると思われる表現も全然見當らないし、この問題にふれていると思われる言及も、相對的剩餘價值とか機械の採用とかいう諸問題に關連して、僅か數ヶ所においてなされているにすぎないということである。例えば、「對象化された労働日全體に對する必要労働日の比率が九對一二（從つて剩餘労働日四分の一）であつたとすれば、資本家の努力は、この比率を六對九（即ち三分の二、從つて剩餘労働日三分の一）に減することである。（このことは後により詳細に展開される筈であるが、資本の一般的概念が問題であるここでは主要點〔のみ説かれる⁽²⁾〕。』

(2) Gundrisse, S. 305. 67~

「機械の耐久性が大であればあるほど、同一量の生産物がより頻繁にそれで以て造られることとなり、流動資本の更新される回数、その再生産の繰返される回数は、より多くなるし、又（機械の磨損を補填するに必要な）價值部分は少くなる、即ち生産物の價格と生産物のその時々⁽³⁾の生産費とは、それだけ減少する。然しながらここで私たちは展開に際して價格關係をまだ持込んで⁽³⁾はならない。市場を占據する條件としての價格の切下げは競争ではじめて説かれる⁽³⁾。』

(3) I. c. S. 651.

「機械の導入を競争と競争によつて解明される生産費削減の法則とから展開することは容易である。『だが』他の資本に對する顧慮なしに、生きた労働に對する資本の關係から機械を展開することが、ここでの問題である⁽⁴⁾。』

(4) I. c. S. 662.

このようなことは果して何を意味するのであろうか。資本一般を問題にし、その中の個々の資本の特殊性は取上げ

ないという『グルトトリッセ』での建前からして、同部門内の競争がここでの本来の問題とされていないということ、は、全く當然のことといわねばならないが、それにしても異門部間の競争については、後で見えるように、言及とは言いながら屢々詳細な展開がなされており、この場合と甚だ對蹠的である。おもうにマルクスの研究の當時の段階では、右の諸引用によって推察されるように、優秀な生産手段の採用による意識的な生産力の向上、このような形をとって行われる同部門内の諸資本の競争とその結果としての相對的剩餘價值の増進といったことについて、かなり明確な理解があつたようであるが、それは専ら價格の觀點からのみ考えられるに止まり（「生産費」あるいは「價格の低下」、「價格關係」）、まだ市場價值や個別的價值といった、後年のような明確な概念は確立されていなかったのではなからうか。

(5) 序でながら『グルトトリッセ』の「生産過程」論中で「相對的剩餘價值」についての一般的説明とされている (Vgl. I. c. S. 972.) 二三九—二五九頁および二九八—三〇〇頁の敘述を『資本論』第一卷第十章と比較して見ると甚だ興味深いものがある。即ち前者においては單に生産力の増大に伴つて v が減少し m が相對的に大となること、然しながらこの m の増増は生産力の増大に比例して進行するものでなく、そのテムボは加速度的に緩慢となり、資本の自己増殖は困難となるものであること、相對的剩餘價值と密接との關連よりするリカアドへの批判、などが述べられているにすぎない。そこでは當然、生産力の増大によって増加する使用價值は、すべて労働者の生活における消費に入りこむ必需品とされ (Vgl. I. c. S. 239.)、個々の資本の觀點からすれば、「その商品が必要生活手段の範圍に屬せようと屬すまいと、それ故労働力の一般的價值に規定的に入りこもうと入りこむまいと、剩餘價值の上昇が存在する」(Kapital, I, S. 333. 青木文庫版、第三分冊、五三七頁) にも拘らず、その生産力の増大が労働力の價值に影響しないような奢侈品の如きは問題外とされている。相對的剩餘價值の生産は、特別剩餘價值を得ようという直接動機のため、資本が自らの手で生産力を意識的に向上せしめざるをえないという競争の強制法則によって、はじめて基本的に説明されうるものであるが、ここで

は個々の資本家のなす行爲は問題とされず、彼等の意識をこえていわばその背後に貫徹する「資本の一般的必然的傾向」(I. c. S. 331. 同上、五三五頁。)、「資本が相對的剩餘價値の生産に際して全體としてなすこと」(I. c. S. 334. 同上、五三八頁。)」のみが研究の對象とされている。従つて、「後で附加される諸規定——競争、價格など——は問題外」(Grundriss, S. 240.)とされ、本來資本そのものの内在的な衝動から展開さるべき生産力の發展も、「かかるものとして資本が問題」となっている現在、「外的な關係」(以上 I. c. S. 238.)、即ち與件として前提され、その本格的な考察は後に殘されている。

さて『グルントリッセ』の中で手稿第六の終にほど近く、その前後と何の關連もなく、「競争」と題して稍々詳細な覺書が挿入されているが、これはその内容から推して、資本一般に續いて展開する豫定であつた競争論の主要内容を示したものと思われる。それは次の通りである。

「競争においては、價值と剩餘價值とに關してうち立てられた法則と區別して展開される所の基本法則は、價值が、その中に含まれた労働によつて、あるいはそれが生産された労働時間によつて、規定されているのではなくて、それが生産されうる労働時間、あるいは再生産に必要な労働時間、によつて規定されているということである。はじめの法則が恰も覆えられたかのような假象を呈するけれども、このことによつてはじめて個別的資本は現實に資本一般の諸條件の中におかれる。然しながら資本自らの運動によつて規定されたものとしての必要労働時間は、かくてはじめて指定されているのである。これが競争の基本法則である。需要、供給、價格(生産費)がより進んだ形態規定である。市場價格としての價格、或は一般的な價格。それから一般的利潤率の指定。かくて市場價格によつて諸資本は種々の部門に配分される。生産費の切下げ等。約言すれば、ここではあらゆる規定が資本一般における場合と反對に現象する。資本一般では價格が労働によつて規定され、競争では労働が價格によつて規定されている、等々。個別

的な諸資本相互間の作用こそが、それらの資本が資本〔一般〕として振舞わねばならぬことを遂行する。一見無關係なように見える個々の作用と、それらの無統制な衝突こそは、それらの一般的法則の指定なのである。市場はここで更に從來と異なる意義を得る。個別的資本としての諸資本の作用はかくて正に一般的なものとしてのそれらの指定となり、諸個別の外見上の無關係と自立的な存続との止揚となる。この止揚は信用において更に著しい。そしてこの止揚が行きつく所の端的な形態、然しながら同時に又自らにふさわしいその形態での窮極的な資本の指定であるような端的な形態は——株式資本である。〕（需要、供給、價格、生産費、利潤と利子との對立、交換價值と使用價值との種々の關係、消費と生産。〕⁽⁶⁾」

(9) I. c. S. 549f.

ここに「生産費の切下げ等」と言っているのは、明らかに今まで述べられたような同部門内の諸資本の競争について言っているものと思われるが、最初に説明されている競争の基本法則とは何を指すものか。『グルントリッセ』の段階としては、まだ生産力が時間的に異なる場合のみについて考えられ、價值は「再生産」に要する労働時間によって規定されると述べられているが、これは後に異なった生産諸條件が空間的に併列して存在する場合に視點が移され、種々の個別的價值をもつ同一種類商品の價值は平均價值＝市場價值として一義的に決定されるという考えに發展して行ったとみてよいのではなからうか。何れの場合にもはじめの法則、即ち投下された労働による價值の規定は、恰も覆されたかのような外觀を呈する。例えば八時間の労働の對象化である商品の價值も、必ずしも八時間とされず、六時間とか、十時間とかいうことになる。然しながらこのような競争の基本法則——同一種類の諸商品が同一の價值をもつということ——によつてはじめて個別的資本は全體との關連におかれることになる。

マルクスにおける競争の概念について（尾形）

こうして見ると、同部門内の競争と一口に言われているものの中には、いわば稍々ディメンションの異なった二つの問題が含まれているらしく思われる。それで『剩餘價值學說史』及び『資本論』に入る前に、私たちはこのことに ついて、少しく立入った考察を加えることにしよう。

普通異部門間の競争では一般的利潤率あるいは生産價格が論ぜられ、同部門内の競争では市場價值の問題が扱われるものとして、對比して考えられており、本稿でも無用の混亂を避けるためこれまでこのような形で敘述を進めてきた。又マルクス自身も、

「競争が先ず以て同部門内でなしとげるとは、諸商品の種々の個別的價值から一つの等しい市場價值及び市場價格をつくりだすことである。だが、異部門の諸資本の競争がはじめて、異部門間の諸利潤率を同一にする生産價格を生ぜしめる。後者のためには、前者よりも資本制生産様式のより高い發展を必要とする。」^⑦

(7) Kapital, III, S. 205f. 青木文庫版、第九分冊、二七一頁。

あるいはもっと詳しく、

「さてリカアドは彼の地代論の主張のために、同一でないのみかむしろ競争の正反對の作用を表わすところの二つの命題を必要とする。第一の命題は、同一部門の諸生産物が同一の市場價值で賣られるということであり、従って競争が異なった諸利潤率を、一般的利潤率からの背離を、強いるということである。第二の命題は、どんな資本投下に對しても利潤率は同一でなければならぬということであり、即ち競争が一般的利潤率をつくりだすということである。第一の法則は同一生産部門内に投下されている異なる自立的諸資本に妥當する。第二の法則は諸資本が異なる生産部門に投下される限りこれらに妥當する。第一の行爲によって競争は市場價值を、即ち同一生産部門の諸商品に對

して同一の價值を、つくりだす、ただしこの同一の價值は異なつた諸利潤を生み出さねばならぬことになる。それ故競争は異なる諸利潤率にも拘らず、あるいはむしろ利潤率が異なるからこそ、同一の價值をつくりだす。更に又他様になしとげられる第二の行爲にあってはこれと異なる。「ここでは」資本を一部門から他部門へと投ずるのは異部門間の諸資本家の競争である。ところが他の競争「即ち同部門内の競争」は、購買者に關係しない限り、同一部門内の諸資本間で行われる。《この第二の行爲によって》競争は生産價格を、即ち異部門間に同一の利潤率をつくりだす、ただしこの同一の利潤率は諸價值の不等に矛盾し、それ故價值と區別される價格によってのみ強いられうるものである。⁽⁸⁾」

(80) Mehrwert, II, 1, S. 58f. 黄土社版、五六—五七頁。

と述べている。

然しながら、これらの敘述から直ちに、平均利潤率乃至生産價格が異部門間の諸資本の競争によってつくられさるるように、市場價值も亦同部門内の諸資本間の競争によってつくられるとなすならば、それは決してマルクスの意とする所を正しく理解したものとは言えないであらう。なぜならば、平均利潤率乃至生産價格は確かに、資本制生産における費用價格の「モディフィケーション」に基づいて等量の資本が等量の利潤の分前を要求する「資本家の競争」の結果として生れるものであるが、同一種類の商品における同一の市場價值の形成のためには、同部門内の諸資本の競争というよりも以前の更に基本的な契機が要請されているからである。即ち市場價值の形成について論ずる場合、私たちは本質的に異なる次の二つの競争を區別しなければならぬように思われる。

その第一は販賣者間と購買者間、およびその各の中での競争。上記『剩餘價值學說史』からの引用でも、「購買者マルクスにおける競争の概念について（尾形）

に關係しない限り」と斷られており、又この前頁では、

「それ故ここでは、一面資本家相互間の競争、一面商品の購買者と資本家間及び購買者相互間の競争は、つぎのよう⁹に作用する。即ち、ある特殊な社會的生產部門内の商品の價值が、この特殊な生產部門内の商品の總量が必要とする社會的勞働時間の總量によって規定されており、個々の商品の個別的價值によって、即ち個々の商品がその特殊な生産者や販賣者に要費せしめた勞働時間によって、規定されているのではない。」

(9) L. c. S. 57. 同上、五五頁。

と明瞭にのべられてゐる。『資本論』でも地代論の中のいわゆる「虚偽の社會的價值」を論じている個所において、

「これ〔一〇クォーターの現實的生產價格は二四〇シリリングであるにも拘らず、六〇〇シリリングで賣られること〕

こそは、市場價值——資本制生産様式の基礎上で競争を媒介して自らを貫徹する市場價值——による規定である。：

…市場價值の規定は……必然性を以て生産物の交換價值に基づく所の、一の社會的行爲——社會的に意識されず意圖され¹⁰ないで行われる一つの行爲だといえ——である。……同一種類の諸商品の市場價格の同一性は、資本制生産様式¹⁰の——また總じて個々人の間の商品交換に立脚する生産の——基礎上で價值の社會的性格が以て自らを貫徹する様式である。」

(10)

(10) Kapital, III, S. 711 f. 青木文庫版、第二分冊、九三〇—九三一頁。

なお、外 Schriften, S. 71 ff. (Lohnarbeit und Kapital) 岩波文庫「賃勞働と資本」、三九—四一頁参照。

と言つてゐる。

市場における販賣者と購買者間、販賣者及び購買者夫々の中での競争こそが、諸商品の中に體現されている諸個別

的價值と異なる、「現實の價值」としての一の市場價值をつくりだすのである。⁽¹⁾ それ故同部門内の諸資本の競争が市場價值をつくりだすといつても、すぐ次に述べられる第二の競争、即ち特別剩餘價值を追求する資本としての競争を別にすれば、それはこのような販賣者としての資格における資本の競争であり（特に第二の競争が直接に介入しない差額地代の場合）、而も上掲諸引用にも見るように、購買者との關係を含めたものであることに注意せねばならない。

(11) 競争が「一の市場價值をつくりだす (schaffen, herstellen)」(Mehrwert, II, 1. S. 57. 前出¹ I. c. II, 2, S. 46. 黃土社版、四二頁。Kapital, III, S. 205. 前出²) ということは決して個別的價值は生産における概念であり、市場價值は流通における概念であるといった具合に機械的に切離して理解されるべきものではないが、さりとて市場價值も個別的價值もひとしく市場の競争あるいは流通と無關係につくりだされるということも出来ないであらう。この問題について立入る餘裕はないのでここでは競争によってつくりだされるのは市場價值ではなくして市場價值であるということを指摘するに止めねばならない。

なお嚴密にいうならば、同一部門内で右に述べられた競争がつくりだすものは一の市場價格（いわゆる一物一價の法則）であり、これが市場價格の「重心點」³ 市場價值（更に生産價格）に落着くためには更に異部門間の競争が要請されてくるのであるが、本稿では特に問題とされる場合を除いては『資本論』の一般的方法に従い、價值（あるいは生産價格）⁴ 市場價格として扱われる。

私たちは以下販賣者と購買者間、その各の中での競争を簡單のために販賣購買の競争とよぶことにしよう。

次に第二の競争として、特別剩餘價值追求のための資本家の競争。第一の競争による市場價值の成立は、資本制生産の十全な展開以前においても、端的に言えば單純商品生産においても、既に考えうる事が前述により明らかである。然しながら單純商品生産においては、市場價值へ均等化さるべき前提なり根據なりとしての、同一種類の諸商品の個別的價值の相違は、まだ偶然的なものとしてのみ止まらざるを得ない。換言すれば、單純商品生産は價值では

なくて使用價值を目的とする生産であるから、市場價值と個別的價值との差というようなものは生産の推進的動機とはなり得ず、優秀な生産條件の採用は未だ生産のための必然として要請されていない。然しながら資本制生産においてはこれと異なり、その目的は價值の増殖にある。特別剩餘價值獲得のための絶えざる生産力の向上は今や資本に對する至上命令となる。かくして同一部門内の諸商品の個別的價值の相違は意識的につくりだされ、従つてこれに基づいて成立する市場價值もここに一の現實的な定在となる。⁽¹²⁾

(12) いうまでもないことであるが、資本制生産の下では市場價值はかかるものとして止まり得ず、その發展した形態としての市場生産價格として現われ、特別剩餘價值は平均利潤を越える超過利潤として現われることとなる。

『剩餘價值學說史』においては、同部門内の競争のうち右に述べた第二の競争については殆ど述べられておらず、専ら第一の競争が特に地代論に關連して詳細に展開されていることは更めていうまでもないであろうが、それでは『資本論』ではどうか。

(13) 就中第二卷第二部第三章「リカアドの地代論」e)の中のβ)「差額地代の諸變化」の節を参照。尙このことは前述のような「グルントリッセ」の中での市場價值論の殆ど完全な缺如と考え併せて、地代論の研究の過程においてマルクスが個別的價值、市場價值という概念を確立した證左としてよいであらう。

『資本論』第一卷第十章において右に述べた第二の競争が説かれていることは一見して明らかであろう。ここでは、「資本制生産の內在的諸法則が諸資本の外部的運動において現象し、競争の強制諸法則として自らを妥當せしめ、従つて又推進的諸動機として個々の資本家の意識にのぼる仕方様式は、今のところ考察すべきでな⁽¹⁴⁾く、競争という外觀的運動の「科學的な分析は資本の内的本性が把握されたときにはじめて可能となる⁽¹⁵⁾」とされつつも、「相對的剩

餘價値の生産の理解のためには……次のことは述べておかねばならぬ⁽¹⁴⁾」として、商品の個數の例によって個別的價値と社會的價値の問題が分析される。この分析により、相對的剩餘價値の生産は決して各資本家「個々の場合における直接的結果なり直接的目的なりで」⁽¹⁵⁾はないのであって、個々の資本家にとつての直接的な目的は、優秀な生産條件の採用により、社會的價値と個別的價値との差¹¹特別剩餘價値を獲得することに外ならず、このため絶えざる生産力の向上は資本制生産の必然として要請されるに至るということが明らかにされている。相對的剩餘價値の生産の場合には、絶對的剩餘價値の生産の場合と異なつて、個々の資本家がいかに振舞うかという「現象形態」⁽¹⁶⁾、あるいは具體的な過程を説かないでは、「資本の一般的且必然的傾向」⁽¹⁷⁾を把握することが出来ない關係にある。即ち特別剩餘價値獲得のための絶えざる生産力の向上を、ただ單なる與件あるいは外的な要因として考えたのでは、勞働を資本の下に質的に包攝するものとしての特殊資本制生産の本質的特徴は理解しえない。資本制生産を超歴史的なものと考えた古典派經濟學の見地からは「幻想的なもの」⁽¹⁸⁾としか思われなかつた、あるいは全く問題にすらされなかつた、相對的剩餘價値の生産と絶對的剩餘價値の生産との區別がここに明確にされているのである。

(14) Kapiäl, I, S. 331. 資本文庫版、第三分冊、五三四—五三五頁。

(15) I. c. S. 536. 同上、八〇六頁。

ところでこの章においては、その意義を考えれば當然のことながら、社會的價値は所與の大いさのものとして前提され、それが市場價値としてどのように形成されるのかという問題、あるいは前に述べた第一の競争については全くふれられていない。この問題は周知のように第三卷第十章において取上げられている。然しながら第三卷第十章が果して本來的に市場價値論を展開する章であると考えてよいかどうか。これについては必ずしも肯定的な見解を許さな

いくつかの重大な疑問がある。例えばこの章は「競争による一般的利潤率の均等化⁽¹⁶⁾。市場価格と市場価値。超過利潤⁽¹⁷⁾。」という表題をもっているが、この表題はその内容とどう関連づけて理解したらよいか。又マルクス自らもいうように、市場価値は理論的にも歴史的にも生産価格に先行するものであるのに、即ち、種々の異なる個別的価値が先ず同部門内の競争によって市場価値へと均らされ、次に異部門間の競争によって成立する一般的利潤率に基づいて、この市場価値の生産価格への轉化が行われるのに、何故市場価値論がこの第十章で、第八、第九章の生産価格論の後においてなされているのか。これらの疑問を解くことは、この章の意義とここで展開されている市場価値論の意義とを明らかにするのみでなく、更に本稿の目的であるところの、マルクスにおける競争の概念の把握のため大きな示唆を與えるものであるが故に、私たちは節を改めて、異部門間の競争について考察した後これとの関連においてその内容に立入ってみたいと思う。

(16) 正しくは「競争による一般的利潤率への均等化」というべきであらう。

(17) *Vel. I. c. III, S. 202, 205 f.* 青木文庫版、第九分册、二六六、二七一頁。

二

異部門間の競争について先ず『グルントリッセ』を見るに、一般的利潤率の概念がこの段階で既に明確にされていたことは一見全く疑う餘地がなく、實に驚くべきことである。後年のような「費用價格」、あるいは「生産價格」といった言葉こそ用いられてはいないが、『グルントリッセ』の中の至る所で、資本の有機的構成⁽¹⁾、資本の廻轉期間⁽²⁾、その他に關連して、又利潤の篇において⁽³⁾、「一般的利潤率」(*die allgemeine Rate des Profits*)⁽⁴⁾、「同」の(平

均) 利潤率」("dieselbe Rate des Gewinns", "the same average rate of profit")、"等しい平均利潤"("ein gleicher Durchschnittsgewinn")、"利潤率の均等化"("die Angleichung der Profitrate")といふような明瞭な表現を以て、諸資本の「一般的剩餘價值への相對的な參加」が説明されている。就中三三九頁以下においては、種々の資本の異なる利潤率がいかにして均等化されるかを、具體的な數字によつて説明しているあたり、『資本論』第三卷第二篇の敘述を思わせるものと云へる。⁽⁵⁾

(1) Vgl. Grundrisse, S. 298 f., 492 f.

(2) Vgl. I. c. S. 444—448, 457, 551, 560 f.

(3) Vgl. I. c. S. 327 Fußnote, 339 f.

(4) Vgl. I. c. S. 646, 653, 701.

(5) 「一般的利潤率なるものは總じて、一産業部門での利潤率が過大であり、他産業部門での利潤率が過小であるということによつてのみ、即ち剩餘價值——剩餘労働に相應する——の一部が一資本家から他資本家に移轉されるということによつてのみ可能である。例えば五個の産業部門において、利潤率が夫々 a 一五%、b 一二%、c 一〇%、d 八%、e 五%とすれば、その時には平均率は一〇%である。然しながらこの平均率が現實に存在するためには、資本家 C に在つては事態は不變であるが、資本家 A と B とは D と E とに七%を、即ち D に二%、E に五%を與えねばならない。労働の生産性、原料、機械、勞賃間の割合及び一般に生産が行われねばならぬ規模に應じて、剩餘労働の割合は夫々全く異なるのであるから、同一の一〇〇の資本に對して利潤率が同一であるということは不可能である。然しながら生産部門 e、例えばパン焼きの部門が必要であるとするならば、その部門に對して平均の一〇%は支拂われねばならない。だがこのことは a と b とが自らの剩餘労働の一部を e に取得させることによつてのみ起りうる。資本家階級は、諸資本によつて個々の産業部門内で現實につくりだされた剩餘價值に應じてでなく、その資本の大きさに比例して平等になるように「總剩餘價值の分前にあずかる」といった具合にしてある程度まで總剩餘價值を配分するのである。より大なる利潤——一生産部門内の現實の剩餘

労働・現實につくり出された剰餘價值・によるところの——は競争によつて水準までおし下げられ、他産業部門での剰餘價值のマイナスはその部門からの資本の引上げにより、従つて有利におかれた需給關係により、水準まで引上げられる。競争はこの水準自身を低下せしめることは出來ずこのような水準をつくり出す傾向を持つに過ぎない。より立入ったことは競争の篇に屬する。このことは種々の産業部門における價格——ある一つの部門では價值以下に下り、又他の部門では價值以上に上るところの——の關係により實現される。これによつて異なる産業諸部門での等額の資本が等しい剰餘労働あるいは剰餘價值をつくり出すかのような假象が生れる。」

然しながら、このような一般的利潤率の形成は、本質的に社會的總剰餘價值の資本家相互間における配分の問題であつて、決して新たな剰餘價值をつくりだすものではないから、もともと「剰餘價值の創造が問題とされる」資本一般には屬しない問題として、「より立入ったことは競争の篇に屬する」とされるのである。これは前の同部門内の競争の場合と同様洵に當然のことであつて、資本一般において個々の資本間の量的あるいは質的差異が問題とされない以上は、諸資本間の有機的構成や廻轉期間の差異、それを基として成立する一般的利潤率の問題などは本來本格的に取上げられる筋合がない。従つて『資本論』の第三卷に對應する第三篇においても、剰餘價值の利潤への轉化、費用價值に相應する「生産費」(Produktionskosten)概念の變化などは說かれるが、競争による一般的利潤率の形成については、諸資本の不等の利潤率がその前提をなすとか、競争ではすべてが顛倒して現象するとか簡単に述べられるのみで、事柄事體は「諸資本の考察に屬する」となされる。

(9) I. c. S. 561 Fubnote.

(7) I. c. S. 646.

『グルントリッセ』におけるこのような考え方が『剰餘價值學說史』から『資本論』へと大きく變化していること

は、更めていうまでもないことであらう。マルクス以前の諸學說にあっては、まだ剩餘價值という範疇は確立されず、それは絶えず利潤と混同されていたのであって、このことは古典學派の代表的な學者であるリカアドにおいてすらそうであつた。しかも資本制生産を特殊社會的なものとして見ることが出來ず、超歴史的なものとするブルジョア的な見地からは、一般的利潤率は中間項なしに所與のものとして前提され、このことは勞働による價值及び剩餘價值の規定を混亂させて、遂には古典派經濟學を崩壞へと導いた蹟きの石の一つとなつた。従つて剩餘價值に關する諸學說を、殊に古典派經濟學を中心として、批判しようとすれば、利潤の問題から更に一般的利潤率の問題にまで詳細に説き及ばねばならないこととなる。かくして私たちは『剩餘價值學說史』の至る所にこの問題が、ある時はマルクス自身の積極的な理論の展開の形で、ある時は誤つた利潤理論に對する批判の形で、展開されているのを見出だす。更にリカアドの地代論が、一般的利潤率を所與として前提する彼の根本的な誤謬から當然導かれる價值と生産價格との混同の上に立っており、そのため差額地代のみを認めて絶對地代を見落していることを發見したマルクスは、地代論を價值と生産價值との區別の「例證」として持込もうと決意するに至つた。これが『剩餘價值學說史』第二卷第一部及び第二部における地代論の展開であると考えられる。⁽⁸⁾

(8) 第一部の絶對地代論はともかく、第二部の差額地代論で市場價值論が展開されている真中に「ここでは價值と生産價格との理論に關する例證として地代の一般的法則を展開することだけを問題としているのであるから云々」(Meinert, II, 2, S. 49, 黄土社版、四五頁)と述べられていることは興味があかい。これから見ると『剩餘價值學說史』での差額地代論、更にその基礎理論としての市場價值論はもと／＼絶對地代論を持たずに差額地代論のみをその内容とするリカアドの地代論批判に關連して書かれたものらしく思われる。

『資本論』においては、周知のように、第三卷第一篇で「剩餘價值の利潤への轉化、及び剩餘價值率の利潤率へのマルクスにおける觀争の概念について(尾形)

「轉化」が説かれた後、第二篇として、「利潤の平均利潤への轉化」が、以前のように單なる言及としてでなく、それ自身理論的に一應まとまった敘述として體系的に展開される。この中では、第八章と第九章において、異なる諸部門での異なる利潤率がいかにして一般的利潤率（或は平均利潤率）へ均らされるか、更にこの一般的利潤率を媒介として價值がどのようにして生産價格へ轉化するかという、異部門間の競争の問題が扱われ、第十一章では勞賃の一般的變動が生産價格に及ぼす影響が説かれている。

ところで問題なのは、前節で既に指摘されたような種々の疑問點を含む第十章である。この章は通常市場價值論の章として考えられているが、果してそのように考えてよいかどうか。私たちは特にこの章が第二篇「利潤の平均利潤への轉化」の章の中で、平均利潤率および生産價格の形成の理論的な敘述の後に位置を占めているということを何よりも先ず念頭におきながら、その内容について少しく立入って見ることにしよう。

先ず章の冒頭において、前章で既に説きつくされた命題、即ち平均の有機的構成をもつ部門での商品の價值はその生産價格と一致すること、その他の諸部門の商品の價值はこの平均の構成をもつ部門の商品の價值へ均等化され生産價格へと轉化されること、が繰返される。が、次に新たな「本來的に困難な問題」⁽⁹⁾が提起される。即ち「いかにして諸利潤の一般的利潤率へのかような均等化が行われるのか」という問題である。一見この問題は既に前章で解決済の問題であるかのように思われる。然しながら、實はそうではないのである。前章では、一般的利潤率の形成と價值の生産價格への轉化とが一般的・抽象的に考察されたが、それが具體的にはいかにして行われるかという現實の過程は論じられていなかった。有機的構成の異なる諸資本の總計が $390c + 110v$ であり、そのつくり出す剩餘價值の總計が $110m$ であるから、この場合平均利潤率は二二%であるといい、又このようにして形成された平均利潤率に基づい

て、各資本がそれぞれ自らがつくり出した剩餘價值と異なる量の利潤の分配を受けるといっても、それは結果からい
わば事後的にのみいえることであって、決してこのような平均利潤の計算や分配を行う中央機關が存在するわけでは
ない。ここでは諸資本がそれぞれいわば「株式會社の株主」⁽¹⁰⁾としての資格をもつて社會的總剩餘價值の分前に参加す
るが、それは決して株主總會のようなもので意識的に行われるところのものではなく、彼等の背後において行われ、
彼等の見たる理解したりすることの出来ない過程である。ここでの中央機關乃至株主總會ともいふべきものは、彼等
自身相互間の諸行為、あるいは萬人が萬人に對して相互に加えあう強制、即ち競争に外ならぬ。かかる意味で彼等は
まさしくマルクスが逆説的に表現したごとく「資本家仲間」乃至「兄弟」⁽¹¹⁾——ただし「虚偽の兄弟」⁽¹³⁾——であり、「友
誼的・敵對的」⁽¹⁴⁾に振舞うのであって、これこそ正に「資本制共產主義」⁽¹⁶⁾なのである。然しながらこの總剩餘價值の配
分の過程が現實にいかに行われるか、あるいは個々の資本家が抽象的な分析の示す上記の結果を生み出すよう行
爲せしめられるのはどのようにしてか、という具體的な研究は前章ではなされず、ただ「これらの種々の利潤率は競
争によつて、一の一般的利潤率に均等化される」⁽¹⁶⁾というような示唆にのみ止まった。この「いかにして」が第十章のは
じめに問題として提起されている。この問題に對する答が「競争による一般的利潤率の均等化」という本章の第一の
表題の内容をなす筈である。

(9) Kapital, III, S. 199. 青木文庫版、第九分冊、二六二頁。

(10) l. c. S. 183. 同上、二四一頁。

(11) l. c. S. 195. 同上、二五七頁。

(12) Marx an Engels, 2. August 1862, Briefe, S. 107. 岡崎謙、上巻、一一二頁。

(13) Kapital, III, S. 225. 青木文庫版、第九分冊、二九四頁。

マルクスにおける競争の概念について（尾形）

(14) Mehrwert, II, 1, S. 188. 黄士社版、一七八頁。

(15) Marx an Engels, 30. April 1868, Briefe, S. 170. 岡崎譯、上巻、二〇四頁。

(16) Kapital, III, S. 182. 青木文庫版、第九分冊、二四〇—二四一頁。

然しながら先へ読み進んでゆくと、この答は提起された間に直接對應するような形ですぐさま展開されてはいないことが見出だされる。「全困難は商品が單に商品として交換されず、資本の生産物として交換されることによって起る⁽¹⁷⁾」とし、先ず基本的に商品が商品として交換される場合、即ち商品が生産價格ではなく價值で賣られる場合がとりあげられ、かようにして、いわば廻り道を経て、提起された問題についての考察がなされている。かくて問題の焦點は次の「市場價格と市場價值」に移される。ここでは一面、價值が「同一種類の商品の生産者間の競争⁽¹⁸⁾」と「市場の存在⁽¹⁸⁾」によって、即ち前に述べた販賣購買の競争によって、種々の個別的價值から均らされた市場價值としてはじめて現實の價值であることが明らかにされると共に、又他面、生産價格が市場價格の中心であるように、價值は「それをめぐって商品の價格が動くところの、そこに價格の絶えざる騰落が平均化するところの、重心點⁽¹⁹⁾」であって、市場價格の變動の中に、あるいはむしろこの變動によってのみ、自ら貫徹せしめてゆくものであることが述べられている。即ち一方では諸個別的價值からの市場價值の形成、他方ではこの市場價值をめぐる市場價格の絶えざる變動という、價值を現實の定在たらしめる二つの競争の過程である⁽²⁰⁾。

(17) I. c. S. 200. 同上、二六三頁。

(18) I. c. S. 206. 同上、二七一頁。

(19) I. c. S. 203. 同上、二六七頁。

(20) この敘述の中には、市場價值の「平均價值」という規定が加重平均かそれともいわゆるモードなのか、又需給關係が異

常な場合に市場價值が必ずしも平均と一致しないで限界價值の個別的價值へ引寄せられるという規定をどう理解したらよいか、需要供給と市場價值規定との關係やここでの市場價值論と地代論との關連はどうか、更に根本的には第一卷第十章と關連して個別的價值、社會的價值、市場價值といった概念をどのように理解すべきか、といった數々の重要な問題があるが、これらについての立入った考察は又他の機会を譲らねばならない。ただここに一言附加しておかねばならないことは、この何れの過程においても労働の引上げあるいは追加という形で異部門間の競争が介入して行くことである。市場價格の變動についてはいうまでもないが、市場價值の形成の場合も、前にふれたように、單なる一物一價でなくこの同一の價格が市場價值に落着くためには、需給關係に應ずる市場價格の變動と部門間の労働の移動とを通じて、當該部門に配分される労働の「異なる意味での必要労働時間」への歸着が行われなければならない。この部門間の競争が不完全であれば、ある部門での生産物の價格は必ずしもそこで個別的價值の平均に歸着せず一方の極に引寄せられたまま固定されるということも起るであらう。

ところでここまでは「現實の」といっても、まだ商品が價值で賣られるものとしてのより低い段階である。十全の發展を遂げた資本制生産においては、この「重心點」である價值——市場價值——が、これと異なる生産價格に代位され、後者が市場價格の變動の中心となることになる。ここでようやくはじめに提起された「いかにして諸利潤の一般的利潤率への均等化が行われるか」という問題に對する解答がなされる。「諸商品がその價值で賣られるならば、それに投じられた資本量の種々の有機的構成に應じて、非常に異なった利潤率が種々の生産部門において生ずる」⁽²¹⁾であるが、明らかに資本制生産はかかる狀態の永續を許さない。即ち「資本は低利潤率の〔即ち有機的構成の高い〕部門から引上げられ、高利潤を生む〔有機的構成の低い〕部門に投ぜられる」⁽²²⁾であらう。然しながらその結果として、前者で生産される商品は供給不足となつて市場價格の騰貴——利潤率の昂騰を來し、後者では反對に供給過剩となつて市場價格の下落——利潤率の低下を來すこととなり、資本はここに後者を去つて前者へ赴くであらう。

ルクスにマおける競争の概念について（尾形）

「利潤率の騰落に應ずるこの絶えざる流出入、一言にしていえば、種々の部門間における資本の分配によって、平均利潤が相異なる生産部門において同一となるような、従って價值が生産價格に轉化するような、需要供給間の比率が生ずる。」⁽²¹⁾

(21) L. C. S. 222. 同上、二九一頁。

この場合も、前の市場價值の場合と同じく、市場における需要供給の關係を反映して形成の過程は變動の過程とからみあいながら行われる。そして現實にはむしろ生産價格と異なる市場價格で諸商品が賣られるということによってのみ、その變動の中心あるいは平均としてのみ、生産價格は現實の定在たりうるのである。ここでも「總じて資本制生産の全體についてみれば、一般的法則が支配的傾向として自ら貫徹するのは、つねに一つの極めて錯雜せる近似的な仕方でのみであり、永遠の諸動搖の決して確定されえない平均としてのみである」⁽²²⁾ことが立證される。

(22) L. C. S. 186. 同上、二四五頁。

、次いでこのような均等化は資本と労働との移動が容易であればある程、資本制生産が発達すればする程、迅速に行われるようになるということなど述べられるが、もともとここで抽象的に扱われた需要供給は、「單純な賣買においてはかかるものとしての商品生産者たちを對立させ」⁽²³⁾て考察するだけで一應足りるのに對し、資本制生産の「より立入った分析では」⁽²³⁾その展開のために諸階級關係についての理解が前提とされるのであって、従ってこの問題に對する「立入った詳論は競争の特殊研究に屬する」⁽²⁴⁾となされる。かくしてこの章のはじめに提起された「いかにして」の現實の過程の分析は本來競争論に屬する問題であつたといわねばならない。⁽²⁶⁾

(23) L. C. S. 221. 同上、二九〇頁。

(24) Vgl. l. c. S. 207, 221. 同「²⁴」二七二頁、二九〇頁。

(25) l. c. S. 223. 同「²⁴」二九二頁。

(26) この後に、言及として平均利潤をこえる二種の超過利潤の存在が地代論を豫想しながら簡単に説明されている。

極めて大づかみながら、このようにしてこの章の内容を見てくると、それは普通いわれているように本来の市場價值論の章、あるいは超過利潤を問題とする場としてあるのではなく、利潤の平均化あるいは生産價格の形成がどのような競争の過程を経て行われるかという説明——その本格的な展開はここでは十分になされていないが——のためづけられているものと見なければならぬであらう。⁽²⁷⁾

(27) 一八六八年四月三〇日附マルクスからエンゲルス宛の手紙において、『資本論』第三卷の内容が述べられているが、これは現行第三卷と比べてみれば、篇別及びその表題は全く同一であり、又第一、第二、第七篇については、その敘述が各章の順を追っての内容と殆ど正確に符合しているのに、第十章に假當する敘述が全く見當らないことも、この章の附隨的な意義を示す一つの證左と考えてよいであらう。Vgl. Briefe, S. 168—172. 岡崎譯、上卷、二〇〇—二〇七頁。

以上私たちは同部門内の競争および異部門間の競争について、夫々がどのような問題を含むものであるかをマルクスの敘述について見て來たのである。が、競争に關する其の他の問題については、前にも述べたように、マルクスの諸著作の中でまとまった展開がなされておらず、多く後の「競争論」に屬するものとして斷片的な言及がなされているのみである。これらの諸言及に基づいて、競争に關連する問題點を項目として拾い上げてみるならば、大體次のようなものがある。

一、需要供給、市場價格⁽²⁸⁾。

(28) Vgl. Grundrisse, S. 206, 310 Fußnote, 331 Fußnote, Kritik, S. 61, 92 Fußnote, 國民文庫版、六、マルクスにおける競争の概念について（尾形）

〇六頁' Mehrwert, II, 2, S. 292f., 黄土社版' 二六八—二六九頁' Kapital, III, Kapitel 6, 10. なお労働力商品をめぐる資本家と労働者との競争、利子率を決定する借手と貸手との競争、地代についての資本家的借地農と土地所有者との間の競争なども、需要供給に關する問題の特殊な場合と考えてよいであろう。

二、總價值又は總剩餘價値の現實の配分。

- (29) Vgl. Grundrisse, S. 637, Mehrwert, II, 2, S. 205, 黄土社版' 一九〇—一九一頁' I. c. III, S. 416, 改造社版全集' 第一卷' 四一二頁' Kapital I, S. 74f., 青木文庫版' 第三分冊' 八五八頁' I. c. III, S. 103, 263, 413, 同上' 第八分冊' 一四七頁' 第九分冊' 三四三頁' 第一〇分冊' 五三七頁。

三、集中、獨占。

- (30) Elend, S. 165—173, 大月書店版選集' 第一卷下' 四一一—四二五頁' Kapital, I, S. 659f., 青木文庫版' 第四分冊' 九七二—九七三頁' I. c. III, S. 814, 同上' 第一三分冊' 一〇七七頁。

四、恐慌。

- (31) Grundrisse, S. 194, 198, 306, 308f., 975, Mehrwert II, 2, S. 215f., 286., 316f., 黄土社版' 二〇〇—二〇一頁' 一二三—一二九頁' I. c. III, S. 52, 改造社版全集' 第一卷一' 六六頁。

五、競争の假象。

- (32) Grundrisse, 338f., 449f., 637f., 647, Mehrwert II, 1, S. 71—76, 95ff., 228, 黄土社版' 六八—七二' 九一—九二' 一二四—一二五頁' I. c. II, 2, S. 214ff., 黄土社版' 二〇〇—二〇一頁' I. c. III, S. 558f., 改造社版全集' 第十一' 五五〇—五五一頁' Kapital, III, S. 252f., 258f., 344f., 青木文庫版' 第九分冊' 三二九—三三〇' 三三六—三三七' 四四五—四四六頁' I. c. Kapital 52.

六、信用との關連。

(33) Grundrisse, S. 550, Mehrwert, II, 1, S. 63f., 黄土社版, 六一六二頁, Kapital, III, S. 476, 655, 青木文庫版, 第一〇分冊, 六一九頁, 第二一分冊, 八五六頁。

このようにして競争についての諸問題を見てくると、それらを一貫する競争の一般的概念は既に略々明らかになってきたようである。私たちは次節においてかかる一般的概念をマルクスの敘述によって確認した上で、これに基づいてもう一度今までの諸問題をふりかえってみることにしよう。

三

私たちがこれまで具體的な諸問題についていわば間接に考察してきた競争の一般的概念について、マルクスはその諸著作の至る所で説明を與えているが、就中『グルトトリッセ』において私たちはこれについての極めて明確且つ詳細な展開を見出だすことが出来る。例えば、

「競争においては、資本のこの内的傾向が、他の資本からこの資本に加えられ、絶えざる『進め！ 進め！』を以て正當な均衡を越えて資本をつき進ませる強制として、現象する。……競争は單にネガティヴに、即ち諸獨占、同業組合、法的諸規制などの否定として、理解されていたにすぎない。封建的な生産の否定として。然しながら競争は又實に向自的なあるものでなければならぬ。單なる零は空虚な否定であり、例えば獨占とか、自然的諸獨占とかなどの形でただちに再び復活してくところの制限の捨象でしかないからである。概念的には競争は、諸資本相互の交互作用として現象し、實現される資本の内的本性、資本の本質的な規定であり、外的必然としての内的傾向に外ならない。」(資本は諸資本としてのみ存在するもの、又存在しうるものであり、従つてその自己規定は諸資本相互の交互作用と

して現象する。)⁽¹⁾

(1) Grundrisse, S. 316f.

「……資本の側よりする自由競争によるツンフト等諸制度の否定の歴史的側面とは、十分に強化された資本が自らにふさわしい交易様式によって、自らにふさわしい運動を妨害阻止したところの歴史的な諸制限を打破ったということに外ならない。然しながら、競争はただ單にこのような歴史的な意義を持ち、あるいはただこのようなネガティブなものたるに止まるものでは決してない。自由競争は他の資本としての自分自身に對する資本の關係であり、言いかえれば資本としての資本の現實の振舞いなのである。資本の內的諸法則——その發展の歴史的階段においては單に傾向としてのみ現われるところの——は、はじめて法則として措定される。資本に基づくところの生産は、自由競争が發展する限りにおいてのみ、自らにふさわしい形態におかれる、というのは、競争は資本に基づく生産様式の自由な發展であり、資本の諸條件の、又このような諸條件として絶えず再生産する資本の過程の、自由な發展だからである。諸個人が自由競争において自由にされているのではなく、資本が自由にされているのである。……自由競争は資本の現實の發展である。競争によつてこそ、資本の本性に、資本に基づく生産様式に、ふさわしいもの、資本の概念にふさわしいものが、個々の資本に對する外的必然としておかれる。競争において諸資本が相互に、又勞働に對して（勞働者相互間の競争は諸資本の競争の他の一つの形態にすぎない）、爲すところの交互的な強制は、資本としての富の自由な、同時に又現實の發展である。……資本が弱い間は、資本はまだ自ら、没落し去った、あるいは資本の出現と共に没落し行きつつある、生産様式の支持を求める。資本は自ら十分強いと自覺するや否や、この支持を投げ捨て、自分自らの諸法則に従つて運動する。資本は自らを發展の制約と感じはじめ、意識しはじめるや否や、資本の支配を完成

するかのように見えながら、「その實」自由競争の束縛によって、同時に資本の解消の、又資本に基づく生産様式の解消の、告知者であるような諸形態へと逃避する。資本の本性の内にあるところのものは、諸資本が資本の内在的規定を相互に、又自らに強制することに、外ならぬ競争によってのみ、外的な必然として、現實に發現せしめられる。それ故ブルジョアの經濟のいかなる範疇といえども、その最初のもの——例えば價值規定のごとき——でさえも、自由競争によって、即ち諸資本相互の、又資本によって規定された他のすべての生産・交易諸關係の、交互作用として現象するところの資本の現實の過程によって、はじめて現實となるのではないものはない。⁽²⁾」

(2) 以下の最後のパラグラフの原文は "Keine Kategorie der bürgerlichen Ökonomie, nicht die erste, z. B. die

Bestimmung des Werts, wird daher erst wirklich durch die freie Konkurrenz; d. h. ..." となつてゐる。まゝでは意味がとれない。恐らく二重否定のつもりであらうと思われるまで。ここでは右のように譯出した。

(c) 1. c. S. 542—545.

これらの引用によれば、マルクスにあっては、競争は一言にしていふなら「資本の内的本性」の發現として捉えられているということが出来る。ところで「資本の内的本性」とは何か、又それを發現させるとはどのようなことか、私たちの考察は、ようやく本稿における問題の核心にふれてきたようである。

はじめに私たちは暫くエンゲルスをして語らしめよう。

「現在の資本制社會においては、産業資本家は夫々自分の欲するものを、自分の欲するように、自分の欲するだけ、自分自身の計算に従つて生産する。然しながら社會的需要は、必要とされる諸對象の量なり種類なりについても、又その質についても、彼には未知量に止まる。今日供給の間に合わないものも明日は需要を遙かに超過して供給

されるかも知れない。それにも拘らず、結局需要は、とにかくにも、よかれあしかれ、充足され、生産は大體において需要された諸対象を基準として規制されるのである。矛盾のこのような調整はいかにして行われるか？ 競争によつてである。そして競争はいかにしてこの解決をなしとげるか？ それはただ、種類なり量なりについて現在の社會的需要に無用な諸商品をその勞働價值以下に減價せしめ、かような廻り道を経て、生産者たちがもとと無用なものを作つたか、あるいはそれ自體としては有用なものを使いきれないほどあまり多く作り過ぎたのだということを、彼等に感知せしめることによつてである。このことから次の二つのことがでてくる。

第一に、商品價值からの商品價格の不斷の背離は、その下でのみ又それによつてのみ商品價值が定在となりうる必要條件であること。競争の諸變動、從つて又商品價格の諸變動によつてのみ、商品生産の價值法則は自ら貫徹せしめ、社會的必要勞働時間による商品價值の規定は一の現實となる。この際に價值の現象形態即ち價格がその表示する價值と通常異なつて現われるということは、大部分の社會的諸關係と共に、價值がになつてゐる一つの運命なのである。……

第二に、交換を行う商品生産者の社會で、競争が商品の價值法則を妥當せしめることによつて、正にこのことによつて、競争はこの諸事情の下で唯一の可能な社會的生産の組織と秩序とを貫徹する。生産物の價格の騰落を通じてのみ、個々の生産者は、どの商品をどれだけ社會が必要としあるいは必要としないかということを、鼻先につきつけられる。この唯一の規制者……

……商品生産が世界市場の規模をとるや否や、私的な目論みのため生産する個々の生産者たちと、需要の量なり質なりについて彼等に多かれ少かれ未知の市場——この市場めあてに彼等は生産を行うのであるが——との間の調整

は、世界市場暴風雨、商業恐慌によってやつのけられる。競争が價格の騰落によって、個々の生産者たちに世界市場の状況を知らせることが出来なくなったとしたら、生産者たちは全く盲目同然となるであらう。」⁽⁴⁾

(4) Elend, Vorwort, S. 33—35. 大月書店版選集、第 卷下、四七三—四七五頁。

ここに資本制生産——より一般的には商品生産——に基づく社會における競争の最も基本的な作用が極めて適切に説明されている。屢々引用されるクーゲルマン宛のマルクスの手紙をまつまでもなく、ある一つの社會が、多少の變動はあれ、ともかく一應順調に存続してゆくための生産に必要な總労働が、社會のそのときどきの欲望に應じて、いろいろの部門に配分されねばならぬということは、一の「自然法則」であり、一つの統制的な意志によるうと、あるいは又一見恣意的な方法により、試行錯誤を通じて暗中摸索的ながら調整される平均としてであらうと、何れにしてもこれが行われなければ、社會のノーマルな再生産は攪亂され、曲りなりにさえ進行しなくなるといふことは、一見して明らかである。他方又その反面として、かようにして配分された總労働の一部を遂行する個々人が、總労働の成果のうちのどれだけを分前として受取るかという分配の方法も、何等かの形できめられていなければならぬということも、亦疑いのない自然法則であろう。然しながら商品生産に基づく社會では、このような、社會の再生産のための總労働の配分乃至總生産の成果の個々人への分配を規制するものは一體何であらうか？ この社會を他の種々の社會から區別して特徴づけるものは、何よりも分業と生産手段の私的所有とである。人々はそれぞれ自己の計算において他人のための、即ち未知の市場目あての、ある商品の生産に専念し、その間には何等直接的な連繫とか、共同の意志とかいったものは見られない。このような無秩序、渾沌の中にあつて彼等に社會的なつながりを持たせ、そしてこのつながりを通じて社會的生産を實現してゆく、かくれた權威は何か？ この直接感知されない、然し嚴然たる強力を

以て絶えざる不均衡と背離の中をあくまで貫徹するところの力こそ、「價值法則」の名を以て呼ばれるものに外ならない。そして競争こそは、この價值法則を媒介し、あらわにし、實現する現實の「推進的動機」であり、「正しい比率を生み出す社會的過程」⁽⁶⁾なのである。商品生産者は誰からも命ぜられて生産を行うわけではない。ただ彼等の間の絶えざる競争を通じてこそ、彼等諸個人の意識をこえて、いわば彼等の背後において、社會的生產は行われ、價值法則は貫徹してゆく。

(5) Vgl. Marx an Kugelmann, 11. Juli 1868, Briefe, S. 185. 西崎譯「上卷」二二二—二二三頁。

(6) Kritik, S. 51, 國民文庫版、五三頁。

「個別的な諸資本相互間の作用こそ、それらの資本が資本「一般」として振舞わねばならぬことを遂行する。一見無關係なように見える個々の作用と、それらの無統制な衝突こそは、それらの一般的法則の措定なのである。」⁽⁷⁾

(7) Grundrisse, S. 550.

然しながら競争による價值法則の貫徹ということは、ただに社會の再生産のための各部門への總勞働の配分ということの意味するのみではない。より具體的に、それが行われるための、競争による部門間の勞働の移動は、常に個々の商品の市場價格の絶えざる變動を通じて、事後的にのみなされるのである。しかも前に見たように、競争の結果としてこの市場價格の變動により、更に又他方では一物一價值という形で「生産物を生産するために必要な勞働時間によってその生産物の價值が規定されるという法則を競争が實現する」⁽⁸⁾ことによって、社會的平均勞働による價值の規定は、はじめて現實のものとなる。

(8) Elend, S. 84f. 大月書店版選集、第一卷下、三二三頁。

かくして競争は、一方では各生産部門に總労働のうちだけが投ぜられねばならぬか、即ち異なった意味での「社會的必要労働時間」はどれだけかということを生産者たちに感知せしめ、まがりなりにも社會的な再生産を行わしめると共に、他方社會的必要労働によって規定される價值を市場價格の不斷の動搖の中でその平均價格あるいは重心點として現實の定在たらしめる。⁽⁹⁾ 價值法則がかかるような二重の意味——實は相互に媒介しあい規定しあうところの——において支配的な法則として貫徹するのは以上のような競争の作用によるものに外ならない。

(9) かような意味では、價值は競争の「結果」(“Ergebnis”)であるといえることが出来る。Vgl. I. c. S. 62. 同上、二八四頁。

然しながら、競争が價值法則を媒介し、實現するものであるということは、資本制生産に限らず、抽象的にはもっとも廣く商品生産一般について言つてよいことであり、以上述べられたことだけでは、競争が「資本の内的本性」の發現あるいは「資本がその生産様式を貫徹するところの方法」⁽¹⁰⁾といわれるのは何故かということは必ずしも明瞭でないであろう。又「資本制生産の内在的諸法則が資本の外的な運動において現象し、競争の強制法則として自らを妥當せしめ、従つて推進的動機として個々の資本家の意識にのぼる」⁽¹¹⁾といわれるときの「内在的諸法則」は單に價值法則のみとはいえないであろう。それでは、資本をして單純なる商品から區別された資本たらしめる本質的特徴は何か、又價值法則と資本の「内在的諸法則」との關連はどのようなものであるか。⁽¹²⁾

(10) Grundrisse, S. 617.

(11) Kapital I, S. 331. Vgl. I. c. S. 262. 青木文庫版、第三分冊、五三五頁、同上、第二分冊、四六五頁。

(12) この問題はそれ自體として一個の重大な問題であり、その十分な展開はここでは許されない。以下においては競争の概念を理解するため必要な限りにおいて簡單な考察がなされる。

單純なる商品の運動、即ち單純なる流通は $W \rightarrow G \rightarrow W$ という形で言い表わされるが、ここでは最後の W はもはや流通界に留まることが出來ず、消費界へと脱落し、價值は使用價值と共に消滅する。従つて同一の價值がはじめにある商品、次に貨幣、最後に他の商品というメタモルフォーゼを行うとはいへ、價值のそれ以上の自己維持は行われず、價值としての運動はそれだけで再生産の契機を持たないから、ここで一旦中斷し、又最初から新しく $W \rightarrow G \rightarrow W$ とし、繰返されねばならない。¹³⁾ 言いかえると、價值は、「あるいは商品として、あるいは貨幣として現われ、……一方の規定にあるときは他方の規定にあることは出來ない。然しながら流通の總體は、即自的に考察してみれば、同一の交換價值、主體としての交換價值が、あるいは商品として、あるいは貨幣として指定されるということにあり、又正にこの二重の規定において自らを指定し、そのそれぞれにおいてその反對物として、商品においては貨幣として、貨幣においては商品として、自らを維持する運動であるということにある。」¹⁴⁾ 然しこの價值の運動はここではまだ即自的なものでしかない。「商品と貨幣との統一として指定された」價值、即ち資本——そこではもはやその對立物は使用價值ではなく、對象化された勞働に對する生きた勞働がその對立物として現われる——¹⁵⁾ においてこそ、あるいは $W \rightarrow G \rightarrow W$ の W が消費過程において自ら新たな價值をつくり出すところの特殊な商品、即ち勞働力である場合にこそ、價值の運動は $G \rightarrow W \rightarrow G$ なる形態において一の無窮動たりうる。何故 G 、あるいは $G + \Delta G$ でなければならぬか。價值の本性は抽象的人間的勞働の對象化としてあらゆるものに對する一般的交換可能性であり、それが現實にはある、一定の、大いさでしかありえないというその量的規定は、このようなその質的規定と矛盾する。それ故價值の自立化としての資本、あるいは「價值としての自らに固執する價值にとつては、増大は自己維持と同一であり、正にその形態規定に、その内的一般性に、矛盾するところの自らの量的制限をこえて絶えずつき進むということによつてのみ、自らを

維持する」⁽¹³⁾のであるし、かくて「致富が自己目的」と⁽¹⁶⁾ならざるをえない。即ち永遠に止まることなく繰返される $G - W - G' (G + \Delta G)$ という自己運動として現われざるを得ない。このようにして見れば、無限の自己増殖という「資本の本性」が實はその根本において價值の概念規定＝價值規定に基づくものであり、従つて資本の「内在的諸法則」といわれるものが實は價值法則——その中心としての價值規定——から出發し、發展したものであることが明らかであらう。

(13) Vgl. Grundrisse S. 166f., Marx an Engels, 2. April 1858, Briefe, S. 90f. 岡崎譯、上巻、八九—九〇頁。

(14) Grundrisse, S. 177.

(15) Vgl. l. c. S. 182f.

(16) l. c. S. 181.

ところでこのような、價值の自立化としての資本の本性は、資本の人格化たる資本家によつてかかるものとして意識されはしない。彼は競争という外的強制によつて自らの資本の絶えざる價值増殖を行うのである。何故外的強制というか。競争は資本家個人が貪欲な人間であろうと將又善意の人であろうと、その主觀に拘りなく、「彼等のうちの最も慈悲ぶかい者をさへ」⁽¹⁷⁾、自らの中に引込まずにはおかないからである。一定量の資本に對しては、異部門間の競争において平均利潤が一先ず確保されねばならない。然し競争はそれのみに止まりえず、更に同部門内において、他に先んじての優秀な生産條件の採用による生産力の増大を通じて、平均利潤をこえる超過利潤が絶えず追求されねばならない。これに成功する者は他の同業者たちをおしのけて市場に地歩を獲得し、これに失敗する者は落伍の悲運に曝されるであらう。獲得された超過利潤は更に新たな資本に轉化され、資本家をしてより大なる生産規模、より優秀

生産條件を以て、次の生産を開始するを得しめる。かくて「進め！進め！」は資本家にとってその生死を決する至上命令となり、絶えざる生産力の増大はシシフスの無限の苦役とならざるをえない。

(17) Engels, „Das Kapital“ von Marx, Schriften, I, S. 440. 大月書店版「マルエン二巻選集、第一巻、三四六頁。

「富の一般的形態——貨幣——を代表するものとしての資本は、その制約を越えようとする、無制限の、度を無視した衝動である。限界(Grenze)という限界は資本にとって制約(Schranke)であり、又制約でなければならぬ。さもなくば、資本は資本——自分自らを生産するものとしての貨幣——たることをやめることになる。資本がある一定の限界をもちや制約とは感じないで、限界としてその中に安んずるようなことがあれば、資本は自ら交換価値から使用価値に、富の一般的形態からその特定の實體的存在に、墮してしまつたことになる。資本としての資本は、無限の剰餘価値を一舉に措定することは出来ないから、ある一定「量」の剰餘価値をつくりだす。然しながら資本はより多くの剰餘価値をつくりだす不斷の運動である。剰餘価値の量的限界は、資本にとっては、それが絶えず克服し絶えず越えて進もうとするところの自然的制約あるいは必然としてのみ、現象する。」⁽¹⁸⁾

(18) Grundrisse, S. 240.

そして又他方、このようにして生産が特殊な使用価値や享樂ではなくて、価値とその増殖を目的とするようになるや否や、前に述べた競争による總労働の配分や価値(發展して生産價格の形態をとる)の定在としての實現——價值法則の實現というようなことも、單に潜在的な傾向としてのみあるのでなく、はじめて現實的な意義をもつものとなるであろう。あるいは價值法則は「資本制生産様式の基礎上ではじめて完全な發展を遂げる」こととなるといつてよい。なぜならば、一方に特殊な使用価値に無關心な資本と、他方これに對應して特殊な労働内容に無關心な労働力と

の對立により、はじめて商品交換は散在的・部分的なものであることをやめて全面化し、價值法則の前提たる勞働の自由な移動は完全に行われることとなるからである。

(61) Resultate des unmittelbaren Produktionsprozesses, Marx-Engels Archiv, Bd. II, VII Abs., Moskau, 1933, S. 126. 研進社版、一二四頁。

かくして競争は、一方では價值法則の貫徹を、潜在的傾向としてのみあるものでなく現實のものたらしめ、他方生産力の意識的な絶えざる増大によって價值の自立化としての資本の本性、即ち無限大への永遠運動を實現してゆく。このような意味において競争は「資本の内的本性」の發現といわれる所以である。

ここに一言附加しておくかねばならぬことは、競争はこれまで見たように「ブルジョア的經濟の本質的な推進者」であるといえ、「決してその諸法則を設定するものではなく、諸法則の遂行者」⁽²⁰⁾に過ぎないということである。

「無制限な競争は經濟諸法則の眞理のための前提ではなく、結果、あるいはその必然がよって以て實現されるとこの現象形態なのである。……従つて競争からはこの諸法則は明らかにされない。競争は諸法則を見えるようにはさせるが、それらをつくりだしはしない。」⁽²⁰⁾

(20) Grundrisse, S. 450.

これについて一、二の例をあげてみよう。先ず貨幣商品（簡單のため金とする）の價值變動の場合⁽²⁰⁾。金の價值が下落すれば、他の事情が同一なら先ずこの金の生産國Aで商品としての金と交換されるB國の商品の價格の昂騰が起るであろう。然しながら同じB國の商品でも、直接金と交換されるA國への輸出品でない他の大部分の商品は、依然として舊價值の金で價值を測られ、その價格は不變である。このため價格の昂騰によって利潤率が高くなった輸出品の

マルクスにおける競争の概念について（尾形）

生産部門に對して、他の諸部門から資本の流入が起り、これに伴なう供給の減少によって他の諸商品の價格も昂騰することとなる。このような資本の流出入の過程を経て、金の低落した價值での諸商品の評價、即ち諸商品の價格の昂騰が逐次全面的となるのである。然しながらこの際金の價值を、又それによる評價としての諸商品の價格を、規定するのは、産源地A國における金の生産のための必要勞働量であつて、決してB國における需要供給の關係、あるいは諸資本の競争なのではない。競争はただ金の新しい價值での評價を輸出品のみに止めず他の諸商品にも全面化せしめ、金の新價值をはじめて現實のものとして妥當せしめるのみである。

(21) Kritik, S. 174, 國民文庫版、二〇一—二〇二頁。Mehrwert, I, S. 255f., 黃土社版、二五六—二五八頁。Kapital, I, S. 123, 青木文庫版、第一分冊、二四〇—二四一頁。

勞賃や利潤についても、競争はその不等を均等化さすことは出來てもその水準を創造はせず、その水準自體は他の內的な諸法則によつて決定されているのであるが、勞働者間乃至資本家間の競争によつて勞賃や利潤の高さがきまるとなされるときは、商品の價格は價值法則に基づいて決定されるのではなくして、夫々獨立に決定された勞賃や利潤（更には地代）という構成部分の合計によつてきまるといふ價格構成論が當然となる。かくして生産價格は自然價格が市場價格を規制する內在的な價格、即ち價值として觀念され、しかも利潤は資本家が商品の費用價格に對し任意に附加しうるものとされるが故に、生産力の増大による個々の商品の低廉化とそれに伴なう利潤率の減少、然し總體としての利潤量の増大というようなことも、資本家が自ら個々の商品に少い利潤を附加し、これを商品の量で補っているいわゆる薄利多賣という形の諸資本の競争によるものと考えられる。又利潤率の傾向的低下も競争によつて諸資本が附加する利潤を減少せしめるためとして説明される。

資本制生産様式のつくり出した諸關係および諸形態は出来上ったものとして生産過程に前提されるが故に、資本制生産を所與のものとし、超歴史的のものとして受取る資本家的觀點よりすれば、右の諸例のように事態は顛倒して現われ、競争は内的諸法則を實現し媒介するものとしてでなく、法則そのものをつくりだすものとして捉えられるようになる。これが即ち競争の假象に外ならない。

さて、このようにして見てくると、私たちが前節まで見てきたいくつかの競争が、最も基本的な價值の現實の措置からはじまって、價值法則およびその發展としての資本の内在的諸法則が種々の段階において發現してゆく過程であることが明らかであろう。販賣購買の競争を通じての市場價值の生成とこれをめぐる市場價格の變動とにより、價值規定はいわばその最も抽象的・平面的な形において妥當せしめられるのであるが、價值の自己増殖という推進の内的起動力を附與された資本制生産にあつては、平均利潤を追及する異部門間の競争によって價值は生産價格へと轉化し、この發展した形態においてのみ價值規定は發現し、價值法則は貫徹する。とはいいいながら、生産價格は直接かかるものとして現われるのではなく、現實には社會の需要供給關係を反映する市場價格の不斷の變動の中において捉えられねばならない。この一見無規制な市場價格の變動を通じてはじめて資本制社會の再生産は迂餘曲折を経ながらも遂行される。然しながら競争によって媒介される資本制社會の運動はこのようないわば圓環運動のみに止まらない。至上命令として資本に強制される超過利潤追求の競争は資本主義の歴史的使命である社會的生產力の飛躍的な増大をもたらし、有機的構成の高度化を招來する。資本の無限の自己増殖は蓄積から集中、更には獨占となつて現われるが、その反面資本の有機的構成の高度化は資本制生産の致命的な自己撞着——一般的利潤率の傾向的低下を内蔵しており、後者は資本の内的諸矛盾の累積による再生産過程の阻害の暴力的突破である週期的恐慌を通じて開展せしめられる。

これらはいずれも資本制社會の縱の運動、あるいはむしろ第一の運動を含む螺旋(Spirale)運動として捉えられるであろう。このように一面では資本制社會のいわば平面的な再生産を遂行し、他面その歴史的な運動——生成、發展、消滅を推進するという両面において、價值法則を樞軸とする「資本制生産の内在的諸法則」の發現を媒介し、實現するものとして、私たちは競争を理解することが出来るのである。

むすび

以上私たちは具體的な諸問題およびマルクスの直接の敘述という両面から競争の一般的概念を考察し、競争が資本の内的本性の發現であるということの内容を明らかにしてきたのであるが、その結果として、かかる一般的概念に基づいて種々の段階における内在的諸法則の發現を展開する競争論は、「資本一般」から現實へ接近する上向の旅の第一歩であり、抽象的な理論の現實への適用の第一段階であるといつてよいであろう。經濟學が科學として確立されるためには、資本制社會の運動法則が最も抽象的・原理的な形で展開されるというのみでは不十分であつて、資本の内的本性が把握された後に私たちのなすべきことは、それがいかなる現象形態をとるか、又それは何故にかということとを解明し、論理的な一貫性を保ちつつ歩一步現實へ接近することである。このような意味でいえば、すぐ前に述べた諸問題の外例えば社會的需要供給の考察において資本家に蓄積と個人的消費との區分を決定させる利潤率と利子率との關係(いわゆる「投資誘因」、あるいはマルクスによつて部分的に考察されていることであるが、費用價格がC+Vとしてのみ考えられず、利子、地代、税金などがその構成要素として入りこんできたり、價值計算でなく價格計算されたり(1)いわゆる「轉形問題」)することに伴う諸變化就中利潤率の變化、乃至は總價值や總剩餘價值において

一方が失うのは他方が得るといふようなことを行われる社會的過程⁽³⁾などについての諸展開は、いずれも理論と現實との媒介の一環として競争論に屬するといふことができるであろう。分析が事物の現象形態にのみ止まっている限り、それは競争の假象のみを追う俗流經濟學となるであろうが、反面內的諸法則についての抽象的な理論を述べるだけでこれに基づいて現象形態がいかにして展開されるかという説明がなされなかったならば、それは一の口頭禪^{フレイ}に終るであろう。しかもこの展開はいわゆる論理の自己運動といった類のもでなしうることもなければ、原理と現實とを機械的に結びつける教條主義によってなしうるものでもない。この展開のための最初の重要な手がかりとしての競争論の意義を、私たちはここに改めてふりかえて見る必要があるのではなからうか。

- (1) Grundrisse, S. 637, Kapital, III, 927f., 930, 青木文庫版、第一三分冊、一二二七—一二三八頁、一二三〇頁。
- (2) Mehrwert, III, S. 200f., 改造社版全集、第一一巻、二〇五—二〇六頁、Kapital, III, S. 184—186, 189f., 青木文庫版、第九分冊、二四三—二四五頁、二五〇頁。
- (3) Mehrwert, II, 2, S. 182—184, 黄土社版、一七二—一七四頁。